

2024年度 春季 ICYE Japan海外ボランティアプログラム 参加報告書



食料配布の様子



ホームステイ先での夕食



現地の小学生と絵本を読んでいる時

1. 参加目的

大学受験に向けて勉強していく中で、世界の社会問題について興味をもつようになった。特に、貧困問題や、飢餓、紛争など社会的に弱い立場にある人たちが直面している課題について興味を持った。そこから、将来的に英語を通じて、世界の貧困問題に関わっていきたいという思いをなんとなく抱き始めた。英語を学ぶ意味について考えたときに、学術的に必要だからというより、世界の様々な国の人とコミュニケーションがとれるという点が非常に意義のあることだと考えてた。英語をツールとして、社会的に何か貢献できるようなことを成し遂げたく、サンフランシスコ低所得者支援の参加を決断した。また、魅力を感じた一つの理由として、ホームステイがある。ホームステイは、現地の人と一緒に住まわせてもらうことで、寮よりローカルな経験ができると考えた。

2. ボランティア実習内容について

月曜日から金曜日の週5日、一日約2, 3時間程度である。活動内容は主に5つ程ある。食堂でのキッチン、ホールと、そこで提供する食事を準備、野外での食材配給、屋内での食材梱包、放課後児童クラブだ。食堂は、いわゆるホームレス、低所得者のひとたちが、ランチやディナーにくる。給食当番のように食事を皿に分けたり、台拭き、皿を下げたり、水を補充したりする。食事の準備は、サンドウィッチづくり、ぶどうもぎ取り、それらの梱包だ。野外での食材配給は、果物や野菜、牛乳等々を使われていない駐車場などの野外で、低所得者の方に手渡し作業である。屋内での食材梱包は、食材が大量に保管されている倉庫で、食材を段ボールに詰めたり、米を軽量して、パッキングする。放課後児童クラブは、現地の子供たちと遊んだり、宿題を教えたりする。

3. プログラムを通して学んだこと

文化の違う人に出会うということはとてもわくわくすることだということを学べた。子供から大人、お年寄りの方まで誰一人として同じバックグラウンドを持つことはない。そんな多くの人たちとちよとしたコミュニケーションをとることは、すべてが新鮮で自分の視野が広がった。また、海外で、改めて自分の意見を明確に相手に伝えること、スモールトークをすることの大切さを知った。英語を思い通りに話せるわけではないので、一回で理解できないこともあるし、間違って解釈したり、されたりすることがある。そういうときに、流れに任せないで、人に聞いたりなどして、自分の言葉で口にすることがよりよいコミュニケーションに欠かせないことだと学んだ。

4. ボランティアプログラムを終えての感想

たった3週間の今回のプログラムだが、多くの素敵な人たちとめぐり会えた。コーディネーターの方、現地で一緒にプログラムに参加した他大学の人、ホストファミリー、ボランティア団体の人、現地で出会った私と同じようにボランティアしている子、途中で一緒に行動することが多かった医大生グループの人たちなど、このプログラムに参加しないと出会うこと、知ることなかった多くの素敵な人たちとめぐり合いあい、新たな価値観を知るとともに楽しい時間を過ごすことができた。大学生活も後半になると、なかなか新しい出会いというのも生まれづらい。そんな中で、日本人含め、現地で出会った方にたくさん支えられながら生活できていたことに感謝する日々だった。短い時間だったが、短い時間だからこそ、いいことも悪いこともすべて非常に濃い毎日過ごすことができた。このプログラムでもったつながりをこれからも継続させていきたい。